

律波根問

2018
2021年6月17日版

アホ 「こんにちは！」

甚兵衛 「おお、誰やと思たらお前はんかいな。まあまあ、こっちいお入り。どないしたんやえらいそんなバタバタして。

アホ 「いや、今そこでたつつあんに会うたら、『早よあんたん所行てこい。あんたがつまみの話してるさかい、お前も行ってこい』ちゆて、んで来ましてんや。つまみ片手に一杯で、そらえらい氣の利いたこつて、おおきい、ごっそうさん！

甚兵衛 「えらい奴が来よったな。いやいやうちにはな、つまみはないねや。

アホ 「いや、そない隠さんでもよろしやおまへんか。そら急に押しかけてんねやから、贅沢は言いまへんわ。まあ例えば、漬物の一つがあつてね、あとは刺身に天ぷら、横に焼き物、椀物、酢の物、ご飯、おみおつけ、それに水菓子の一つもあればそれだけで！

甚兵衛 「そらお前、お膳一人前やないか。誰がそないに出すかいな。あのな、つまみやない。わしが話しとったんは、つまみや。ええか、つまみや。

アホ 「ツナン身？

甚兵衛 「何言うてんねん、ツナの身とちやう。食い意地の張ったやつちやで…。だいたいお前はん、津波が来たらどないするつもりや。来てからでは遅いねやで。

アホ 「つまみ？津波？ああ、津波かいな。またええつまみでも入ったんかと…。まあ折角来たんや、一杯ぐらい出したれ氣の汚い。

甚兵衛 「どっちが氣が汚いねん…。ほなまあ、こないしょうか。お前はんがわしの津波の話を聞いて、ちゃんとわかったら、つまみ出すと。これでどないや。

アホ 「そらよろしおますな。ほたらその津波っちゆうのは、そもそも何で起こりまんねや。

甚兵衛「ほお、お前はんは切替え早いのがええとこやな。

アホ「そらもう、一杯待ってますさかいにねえ。

甚兵衛「厚かましいやつちゃ。まあかめへんわ……。津波いうんはな、地震で海の底が動いて、その上の海の水、これ全部を押し上げて起こんねや。海の底から海面までやったら、水がぎょさんあるやろ。これがみな塊となって襲ってくるさかいに城でも流されてまう。

アホ「クジラみたいなもんでんな。

甚兵衛「何がや。

アホ「城流すクジラいいまっしやろ。

甚兵衛「そら、シロもナガスも意味が違うやろ。まあ、クジラは浜の方に来ても別に大きなあつてなるぐらいで人の命には関わらんけど、津波は違うねん。陸まであがってきて人まで飲み込んでしまう。また津波は大きいもんや。狭い入り江とかに入ってきたら10mからの高さにもなるねやで。

アホ「10m？そら高いねえ、天保山より高いがな。

甚兵衛「あのなあ、天保山言うたら、日本でも「む」を争う低い山やろ。ま、たてもんでいうたらゝ階建てぐらいやな。

アホ「ほお、『山、高きが故に貴からず』って聞いたことおますわ。

甚兵衛「よおそんな言葉知ってるなあ。ま、津波は山やないけども、高かろうが低かろうが尊いことはなりんもないねや。

アホ 「その点天保山は尊い。登ったら証明書がもらえる。

甚兵衛 「天保山から離れえ！で、この津波、お前はんクジラや言うてたけど、まるで違う。もう、速いの速ないの。すぐ逃げんと、ぼーっとしてたら命取りになるで。

アホ 「へえー、そない速いんでつか。どんぐらい？

甚兵衛 「海の深い所やとジェット機、まあ飛行機やな、それと同じぐらいや。岸に近づいて浅あなってきたら遅なるけど、今度は急に高なつてまうねや。

アホ 「岸に来て遅なるんなら安心でんな。

甚兵衛 「安心できたもんやない。遅なると言うても、10秒で100mはいくで。自転車の2倍とかや。大阪のおばちゃんが鬼の形相で自転車こいで、いつもの倍速で襲ってくるトコ

考えてみ？

アホ 「うわあー。そらメチャメチャ怖いでんなあ。早よ逃げな。見てから走ったんではとても間に合わん。

甚兵衛 「せやさかい、まずは『津波と聞いたらすぐ逃げる』。最近、赤と白の津波フラッグ言うのもある。これも見たらすぐに逃げるねやで。

アホ 「紅白の旗振って、逃げるんを応援してくれてるんやね。

甚兵衛 「そんなのんびりしたこっちゃない。とにかく、津波からはすぐさま逃げる。まずはこれや、わかったか？

アホ 「『津波と聞いたらすぐ逃げる。』わかりました。けど今、『まずは』いいましたな。まだ他にもありますの。

甚兵衛「『とにかく高い所へ逃げる』、これがいつ目や。津波は海から来る。勿論その順として、低いところから低いところから来るわな。せやから今いるところよりも高う高う避難するんが大事なんや。」

アホ「ほお、『とにかく高い所へ逃げる』ね。ほな、みんなで富士山頂に集まればええわけでんな。」

甚兵衛「どこまで逃げる氣いや。まあまあ、高いところへ逃げるんが大事やな。」

アホ「けど、あんまり高いところに逃げたら皆に笑われまへんか？」

甚兵衛「何でじゃいな。」

アホ「昔からいいまっしゃろ、『煙と何とかは高いところが好き』」

甚兵衛「そんなこと言うてる暇はないねん。津波来てるときに高いところにいかんほうが余程『何とか』や。」

アホ「さいでつか、『とにかく高い所へ逃げる』ね。まだおまつか？」

甚兵衛「後は『津波で逃げたら戻らん』これも大事やな。津波は『寄せても返す波』という言葉がある通り、繰り返しなんべんもなんべんくるさかい、『もう大丈夫や』いうて家に帰るんが危ない。大体津波警報いうんが出とるさかい、この間は戻らんと避難しとくんが大事や。」

アホ「ほたら、その津波警報は、いつ終わるまんの。」

甚兵衛「一口にはよう言わんが、五分二十分ちゆうことはないな。夕方に出了たらその日は家

に帰られへんかもしれん。

アホ 「長おまんな。ほな、食料やら色々持ち出さんならんねえ。米一俵とか。

甚兵衛 「いつまで逃げてる気いや。まあ、大きい地震でも数日のうちにはおさまる。当面のもんがあればええ。

アホ 「なるほど、当面のもんねえ。けど、なんぼ当座のもんでも、警報出てから詰めてたら逃げれまへんで。

甚兵衛 「せやから普段から詰めとくねや。避難袋ちゅうやつちや。

アホ 「なるほど、『津波で逃げたら戻らん』ねえ。

甚兵衛 「とりあえず、今大事なことゝつ言うたが、わかったか。

アホ 「そろもう、よーわかりました。何せつまみのため。

甚兵衛 「まあ、食べ物絡んだら覚えるんはお前のええところかもしれん。ほな、おさらいや。『津波から身を守るために』一つ目は何やった。

アホ 「えゝ、『つまみが出たらすぐ食べる』。

甚兵衛 「つまみやない、津波。津波食べる気いか。『津波が来たらすぐ逃げる』や。こつ目は？

アホ 「『とにかくあったかい所へ逃げる』。

甚兵衛 「いや、『あ』はいらん。高いところへ逃げんねん。

アホ 「けど、津波は水やさかい、かぶったとき寒いとこやったら風邪ひきまっせ。

甚兵衛 「かぶったらもう手遅れやないかい。 かぶらんように高いところへ逃げるんや。 つ目は？

アホ 「『つまみはとったら戻さん』。

甚兵衛 「行儀の話やないねん。『津波で逃げたら戻らん』や。 情けないなあ、お前はん、ひとも合うてへんな。

アホ 「もうワタイ、腹が減って…。 つまみ出してくれんと覚えるもんも覚えられん。

甚兵衛 「厚かましい奴やな…。 ほなお前、外へ出え、外へ。

アホ 「え、外でまんの？ 外につまみあるか？

甚兵衛 「ええから、出え言うてんねん。

アホ 「ほなまあ、出ますわいな(外へ出る)出ましたで。

甚兵衛 「出たか？ 出たな？ おっしや、ガラガラガラ(戸を閉める)。

アホ 「何しまんねん！ ワタイのことしめ出して、つまみ出す約束でっしやろ！

甚兵衛 「そうや、せやさかいお前をつまみだした_まがな。